

《論 文》

サッカー選手の移籍から見た国際関係

—ヨーロッパを中心に—

寺 阪 昭 信

International Relationships as seen through the European Transfer System
of Professional Football Players
AKINOBU TERASAKA

キーワード

ヨーロッパ (Europe), ワールドカップ (World Cup), チャンピオンズリーグ (UEFA Champions League), 世界ランク (World Ranking), サッカー選手の移籍 (Transfer System), 外国籍選手 (Foreign Players), イングランド (England), ドイツ (Germany), フランス (France), イタリア (Italy), スペイン (Spain)

1 ヨーロッパにおけるリーグ戦の状況

先の論文においてはサッカーと地域とのつながりに関して、主としてドイツの事例を見てきたが¹⁾, 本論文ではヨーロッパというより広域を対象として国レベルにつき、国境を超えた選手の移籍をとりあげて地域間の結びつきを考察することにした。ヨーロッパがサッカーにおける発祥地でもあり²⁾, 核心地域であることはワールドカップの優勝回数 (ヨーロッパ9, 南アメリカ9) にも表れ, 多くの選手が集まってくる吸引力がある。そこにはサッカーを取巻く広義の環境, 距離, 言語を含めた文化圏, 過去および現在の国際関係が投影されていることが予想される。もちろん, サッカーの強さやスタイルから言えばブラジル (ワールドカップ最多優勝5回) も一つの中心ではあるが, 国の経済力から言っても選手の輸出国になっているので中心性を欠くといえる。そのことは彼らが今日の日本のサッカーを支えていることを日常眼にしていることから明らかであろう。こうした状況について幾つかの資料を検討して, サッカー選手の移籍について, すなわち出身国 (ヨーロッパ諸国と他大陸別) と実際に日常的

にクラブチームに所属してプレーをおこなっている国との関係を検討してみることにする。

ヨーロッパ各国におけるサッカーリーグはトップリーグの下にいくつかのリーグを抱えて全国的に厚い支持層の下でリーグを形成している。そのなかでもイギリスのイングランド (プレミアリーグ), イタリア (セリエA), スペイン (スペインリーグ1), ドイツ (ブンデスリーグ1) の4国が最もレベルが高いリーグと言われている。その理由としては, ヨーロッパ自体のサッカーの伝統から生まれている水準の高さとともに, 高い報酬が得られることと名誉を求めて, 資質と技術の高い有力な選手が世界中, 特に南アメリカとアフリカから集まってくるからであり, またヨーロッパ諸国間での移動もこれらを軸として活発に行われているからである。後に見るようにプロ選手の登録数も関係するが, この状況は選手の輸出国も輸入国ともに国による差異が大きい。

2 ヨーロッパ諸国のワールドカップにおける実績

2-1 ワールドカップの成績

過去のワールドカップにおける各国の成績を

表1 ワールドカップ成績 (1930-2006)

	07ランク		回数	試合数	ポイント	プロ選手
1	3	ブラジル	18	92	162	14,709
2	4	ドイツ	16	91	145	840
3	1	イタリア	16	76	122	3,152
4	2	アルゼンチン	14	65	88	2,500
5	9	イングランド	12	55	74	2,500
6	6	フランス	12	51	69	1,331
7	7	スペイン	12	49	65	1,362
8	20	スウェーデン	11	46	50	1,500
9	5	オランダ	8	36	50	900
10	22	セルビア・モンテネグロ	10	40	42	800
11	26	ロシア	9	37	42	3,920
12	19	ウルグアイ	10	40	40	1,000
13	13	メキシコ	13	45	39	15,000
14	16	ポーランド	7	31	37	1,150
15	11	チェコ	9	33	33	1,208
16	55	ハンガリー	9	32	33	852
17	60	ベルギー	11	36	32	386
18	85	オーストリア	7	29	28	360
19	8	ポルトガル	4	19	28	2,244
20	46	スロバキア	8	30	27	1,918
21	12	ルーマニア	7	21	26	3,920
22	42	スイス	8	26	24	300
23	31	パラグアイ	7	24	24	180
24	47	チリ	7	25	20	1,125
25	28	デンマーク	3	13	20	940
26	10	クロアチア	3	13	20	605
27	50	韓国	7	24	19	417
28	18	合衆国	8	25	18	6,928
29	35	ブルガリア	7	26	17	960
30	25	カメルーン	5	17	16	450
31	21	トルコ	2	10	15	5,577
32	14	スコットランド	8	23	15	2,785
33	23	アイルランド	3	13	14	520
34	32	ナイジェリア	3	11	13	1,400
35	52	ペルー	4	15	11	2,500
36	36	北アイルランド	3	13	11	370
37	24	コロンビア	4	13	10	2,500
38	38	モロッコ	4	13	9	100
39	29	ノルウェー	3	8	9	800
40	57	エクアドル	2	7	9	9,656
41	51	サウジアラビア	4	13	8	458
42	56	コスタリカ	3	10	8	1,040
43	34	日本	3	10	8	1,120
44	40	セネガル	1	5	8	50
45	17	ウクライナ	1	4	7	2,010
46	37	チュニジア	4	12	6	311
47	73	南アフリカ	2	6	6	250
48		東ドイツ	1	6	6	
49	53	ウェールズ	1	5	5	320
50	85	アルジェリア	2	6	5	260
51	40	イラン	3	9	5	20
52	48	オーストラリア	2	7	5	200
53	131	北朝鮮	1	4	3	0
54	96	ジャマイカ	1	3	3	110
55	71	キューバ	1	3	3	0
56	27	コートジボワール	1	3	3	50

資料：FIFA（2006）及びプロ選手数はAlmanac of World Football 2007より作成

順序づけたものが表1である。これは既存の2002年大会までのFIFAのデータに2006年大会の結果を加えて作成したものである。³⁾ 今まで行われた18回の大会の参加回数、試合数、成績のポイント数（勝：2/3、引分：1）のみを使用した。本大会に参加したことのある76国⁴⁾のうち、3ポイント以上ある国（勝または複数の引き分けをもつ）56国をポイント数の高いものから配列した。同一の場合は試合数の多い国を上にしてある。これは1930年以来の歴史を刻んだ実績であるために、現在の力関係を直接に示すものではないので、現在の世界ランクも示した。サッカー界における国の置かれている状況をそれなりに反映したものである。

内訳をみるとヨーロッパ29、アフリカ8、南アメリカ9、アジア・オセアニア6、北・中アメリカ4ということになって約半分をヨーロッパが占めていることになる。優勝経験国は上位6までにそろい、それに12位のウルグアイに限られている。20位までにはヨーロッパのほかには南アメリカの2大強国ブラジル、アルゼンチンに、ウルグアイ、メキシコを加えるのみである。アジアでは7回出場の韓国が27位で最上位であり参加国は7国に過ぎない。近年力をつけてきたアフリカは9国⁵⁾が参加してカメルーンの30位が最高位である。ちなみに日本は43位と現在のランキングよりかなり低く、伝統の違いが明瞭に表現されている。南アメリカは加盟10国中9までがこの表に含まれる（出場経験の

ないのはベネズエラのみ）のも注目してよい。

2-2 現在の世界ランク

ここに示されたランクは試合数、相手国との関係もあり必ずしも絶対的な基準ではないが、成績を点数化して相対的な比較と目安としてFIFA加盟200国について毎月のリポートが発表される（FIFA Magazine、月報など）。ここではFIFAのホームページ（<http://www.fifa.com>）から2007年8月現在のものを使用した。大陸別組織による順位はヨーロッパ（51国）、南アメリカ（10国）、アフリカ（51国）、北・中アメリカ（38国）、アジア（39国）・オセアニア（12国）⁶⁾ という序列がはっきり示される。

このランクを表2のように整理するとより明確になる。上位20位までをみればヨーロッパが15、南アメリカが3、北・中アメリカ2となり、アフリカ、アジア・オセアニアは入っていない。50位までではヨーロッパが28と半数を超え、南アメリカが加盟国10のうち6、北・中アメリカは増えないで2となり、アフリカは一挙に10となり、アジア・オセアニアが4というレベルである。それを100位までに拡張するとそれぞれが43/全51国に対して84%（以下同様）、10（すべて）、23/51、12/39、12/51ということになり、大まかにアフリカ45%、北・中アメリカ30%、アジア・オセアニア25%という順に低下している。ヨーロッパ諸国の中で100位以下にあるのはルクセンブルク・アンドラのような

表2 大陸別世界ランク数（2007年8月）

加盟国	51	10	51	38	51	201
順位	ヨーロッパ	南アメリカ	アフリカ	北・中アメリカ	アジア、オセアニア	合計
合計	43	10	23	12	12	100
91-100	1	0	4	2	3	10
81-90	4	1	2	2	1	10
71-80	4	0	4	1	1	10
61-70	3	0	3	2	2	10
51-60	3	3	0	3	1	10
41-50	3	1	3	0	2	9
31-40	5	1	3	0	2	11
21-30	5	1	4	0	0	10
11-20	7	1	0	2	0	10
1-10	8	2	0	0	0	10

資料：FIFAから作成

小国と旧ソ連の解体以後に独立した国々ということになる。

国別のプロ選手数を表1で見ると、後に見る選手の潜在的な供給力を現しているものと考えられる。直接ヨーロッパ諸国への選手供給を説明できるわけではないが、メキシコ、ブラジルが桁違いに大きく、エクアドルがそれに続くし、パラグアイはよくこれだけの人数で良い成績を上げているのか驚きである。ドイツ⁷⁾が極端に少ないことを除くとヨーロッパの主要国ではトルコがずば抜けて多いのが目立つほか、ロシアは当然としてもイタリア、イングランドが多いし、人口数からみてスコットランド、ポルトガルが多い。約半数の国は1,000人以下であり、アフリカではかなり限られた数の選手しか存在できない。プロ選手としてそれぞれの国における規模がさほど大きくないことが、より魅力的なリーグのある国に移籍を希望する根源となるのではないかと考えられる。日本はそれなりに整ってきたことを示している。

2-3 ワールドカップ出場国における選手の構成

ヨーロッパ主要国の中から2006年ワールドカップ出場国におけるナショナルチームを構成

する選手（登録選手23人）がどこの国のリーグに所属しているかを示したものが表3である。各行がナショナルチームに選出された選手の所属するリーグを示したものである。その他は出場国以外のリーグに属している数である。右端に外国に移籍した選手総数を示すから0のイタリアチームはすべて自国リーグに所属していることを示すし、チェコは21人、クロアチアは19人も外国に出ていることになる。スイス、ポルトガル、セルビア・モンテネグロ、スウェーデン、オランダも半数以上の人外国で試合をしていることになる。

他方、縦の列はそれぞれの国のトップリーグで受け入れているワールドカップ出場選手数を示す。多くを受け入れている国が、イングランド、ドイツ、イタリアである。その下の数字は受け入れと流出数の差し引きである。フランスはイングランド、イタリア、スペイン、ドイツで試合しているフランス人選手数とフランスリーグに所属しているチェコ、ポルトガル、スイス、スウェーデンからの選手数が12人ずつで差し引き零ということを示している。

この結果、クロアチア、ポーランド、ポルトガル、セルビア・モンテネグロ、スイス、スウェーデンは完全に選手の輸出型国である。イ

表3 2006年ワールドカップヨーロッパ出場国の選手構成

	CRO	CZE	ENG	ESP	FRA	GER	ITA	NED	POL	POR	SCG	SUI	SWE	UKR	その他	他国 リーグ
CRO	4					5	3							2	9	19
CZE		2	2		2	5	3	2							7	21
ENG			21	1		1									0	2
ESP			5	18											0	5
FRA			7	1	11	1	3								0	12
GER			2			21									0	2
ITA							23								0	0
NED				5	2	2		14							0	9
POL				3		2			9					1	8	14
POR				6	3	3	1	1		8					1	15
SCG				2	3	2	1				8			2	5	15
SUI		1	2		4	7	2					7			0	16
SWE			2	1	3	1	1	1					9		5	14
UKR						1	1								20	3
受入数	0	1	36	11	12	28	15	3	0	0	0	0	0	5		
差引	-19	-19	34	6	0	26	15	-6	-14	-15	-15	-16	-14	2		

資料：2006年ワールドカップドイツ大会公式プログラムより作成

注：CRO クロアチア、CZE チェコ、ENG イングランド、ESP スペイン、FRA フランス、GER ドイツ、ITA イタリア、NED オランダ、POL ポーランド、POR ポルトガル、SCG セルビア・モンテネグロ、SUI スイス、SWE スウェーデン、UKR ウクライナ

ングランド、ドイツ、イタリアそれに数は減るがスペインが選手輸入国であり、4大リーグといわれることを証明している。フランス、オランダはやや微妙な位置にあるが、これが各国リーグの試合のレベルないしは力量、選手の移籍に対する、同時に観客にとっての魅力を示すものである。例外はウクライナであり、旧東ヨーロッパ圏との係わりで選手が移動しているが、ドイツ、イタリアリーグに1人ずつしか出していないので基本的には閉鎖的であるか、あるいはよりレベルの低い東ヨーロッパ諸国から入ってくるとみなしてよいであろう。

他の大陸についても同様の表を作ると（煩雑なので本論に収録しないが）アフリカとアメリカ（北・中と南）はともにヨーロッパには出て行くがそれぞれの域内での選手の移籍は少ない。アフリカは圧倒的にヨーロッパに向かい、アンゴラは10人が国内組みであるが、コートジボワールになると全員外国リーグに所属している。アメリカ大陸ではコスタリカ、メキシコ、エクアドルが国内組みが多い構成である。アルゼンチン、ブラジルはそれぞれ3人、トリニダード・トバゴは4人しか国内から選ばれていない。やはり、選手市場としてヨーロッパほどの魅力はないといえる。それに対してアジアの場合は移籍が域内、域外（ヨーロッパ）ともに少ないのである。

3 ヨーロッパの強国

3-1 ヨーロッパチャンピオンズリーグ

ヨーロッパ諸国内のリーグ戦としてはUEFA（1954年成立）とよばれるヨーロッパのサッカーを統合する組織のもとで、1956年以来毎年チャンピオンズリーグと言う形で、各国のリーグ優勝チームによるトーナメントを行ってきた。国によるレベルの差からサッカー大国に有利な条件に制度と規模は変わってきたが、前年度の各国の上位チームを集めてリーグ戦を行い、ヨーロッパ最強のチームになることを争う。小国には2段階の予選リーグが課せられ、

それを勝ち抜いて本戦に残るのはなかなか困難である。4年ごとに行われるナショナルチームによるワールドカップやヨーロッパ選手権以上にその地域・都市に密着したチームが参加するので盛り上がっている。

毎年国別数の割り当てに変動があり、予選リーグにより参加国に違いはあるが、2007-08年度でいえば本戦（1次リーグ）出場の32チームを国別に見るとイングランド、スペイン、イタリアが4、ドイツ、ポルトガルが3、フランス、スコットランド、トルコ、ウクライナが2、あとの6国（オランダ、ギリシャ、ルーマニア、チェコ、ノルウェー、ロシア）は1チームという数になり、国による出場割り当て数のランク付けが行われている。上位クラブ（ヨーロッパでG14といわれる）、チャンピオンズリーグの常連ビッグチームが巨大な資金力をもとに有力選手を集めて現在の動きを支配している。参加し、勝ち進むほどに莫大な収入が増える仕組みとなっている。それらのチーム所在都市は複数のチームがほとんど常に存在するロンドン、ミラノを筆頭に、ローマ、マドリー、バルセロナ、マンチェスター、ミュンヘンなどが続く。

これに関連した資料を表4にまとめた。本行われている2007-08年度を含めた最近9年間（1999-2000年度以後については筆者による整理）にすべて出場したチームは6あり、イングランドがマンチェスター・U⁸⁾（3位、234点）、ロンドンのアーセナル（8位、147点）、イタリアがミラノのAC・ミラン（4位、228点）、スペインがレアル・マドリー（2位、237点）、それにオランダのPSV・アイントホーフェン（13位、110点）、ギリシャ、ピレウスのオリンピアコス（28位、63点）である。後2者は最後までに残れないが、前4者はアーセナルを除くと優勝経験が豊富なチームである。さらに8回出場組み4チームを見るとスペインのバルセロナ・FC（1位、243点）、ドイツからバイエルン・ミュンヘン（5位、198点）の優勝経験チームが加わり、それに近年常連となったフ

表4 UEFAチャンピオンズリーグ

順位	国名	(99-04) ポイント	チーム名	(91-07) 試合数	ポイント	順位	優勝回数	(99-08) 出場回数	(06-07) 外国/国内選手数
1	スペイン	79,851	FC・バルセロナ	128	243	1	2	8	15:08
			R・マドリー	127	237	2	9	9	14:12
			FC・バレンシア	64	112	10		6	08:22
			D・ラ・コルーニャ	58	84	19		6	09:20
2	イングランド	62,153	マンチェスター・U	131	234	3	2	9	17:17
			FC・アーセナル (ロンドン)	93	147	8		9	27:04
			FC・チェルシー (ロンドン)	58	102	14		6	20:09
			FC・リバプール	54	92	16	5	6	24:11
3	イタリア	59,186	AC・ミラン (ミラノ)	123	228	4	7	9	13:16
			ユベントス (トリノ)	106	182	6	2	6	15:13
			インテル・ミラノ	58	99	15	2	6	21:04
4	ドイツ	49,487	バイエルン・ミュンヘン	118	198	5	4	8	14:13
			ボルシア・ドルトムント	53	91	17	1	3	11:16
5	フランス	48,326	O・リヨン	62	110	11		8	11:16
			AS・モナコ	48	75	23		3	15:14
6	ポルトガル	42,333	FC・ポルト	108	158	7	2	7	16:06
			ベンフィカ・リスボン	40	61	29	2	3	14:10
7	ギリシャ	34,748	パナシナイコス (アテネ)	75	89	18		5	*09:07
			オリンピアコス・ピレウス	62	63	28		9	13:10
8	オランダ	34,081	アヤックス (アムステルダム)	72	113	9	4	4	15:13
			PSV・アイントホーフェン	86	110	13	1	9	16:10
9	チェコ	33,075	スパルタ・プラハ	70	71	27		6	*03:13
10	トルコ	32,291	ガラタサライ (イスタンブール)	78	84	20		6	06:20
11	スコットランド	32,125	グラスゴー・レンジャーズ	56	72	25		5	**09:16
12	ベルギー	28,875	アンデルレヒト (ブリュッセル)	70	72	26		6	10:09
14	ウクライナ	22,125	ディナモ・キエフ	89	110	12		8	16:11
15	ノルウェー	21,900	ローゼンボルク (トロンヘイム)	76	77	22		7	**09:13
21	ロシア	19,916	スパルタ・モスクワ	66	78	21		5	11:12

資料：Kicker (2007) Champions League

※：04-05年度

※※：07-08年度

ランスのO・リヨン (11位, 110点), ウクライナのディナモ・キエフ (12位, 110点) である。優勝チームはこれらにイングランドのリバプール (6回, 16位, 92点), ポルトガルのFC・ポルト (7回, 7位, 158点) が加わるのみで, 上位チームが固定化されていることが分かる。

この間の出場チームの国数は26になるが, チーム数を見ると, スペイン10, フランス9, ドイツ8, イタリア7, イングランド6, オランダ, ポルトガル5, あとの国は2ないし3チームである。ほぼ常時出場枠が取れている国はその他にチェコ, トルコ, ロシア, スコットランド, ノルウェー, ベルギーといった国であり, サッカー小国は数年に1回1次リーグにたどりつけるという格差が厳に存在する。これらはベルギーのランク60位を除くと現在の世界ランク30位以内の国になる。他方, ランク上位に

ありながら, チャンピオンズリーグでは目立たない国として, クロアチア (10位), ルーマニア (12位, ステアウア・ブカレスト⁹⁾ 38位, 38点), ポーランド (16位), スウェーデン (20位, 1 FC・ゲーテボルグ 33位, 49点), などがあり, 国内リーグがあまり活発でなかったり, かつては常時出場していたが現在力が落ちて安定したチームをもたない国ということになる。

いまひとつUEFAカップリーグがある。これは各国のリーグカップ優勝国同士でのリーグ戦であったが, チャンピオンズリーグの改革とともに参加方式が変わり, チャンピオンズリーグに出られない各国の上位チームと, チャンピオンズリーグの予選敗退組みが加わる方式で行われている。本戦は40チームによるトーナメントとなっている。これは範囲が広く, データも整ったものを持っていないので省略する。

3-2 ヨーロッパ選手権

まず、ヨーロッパ選手権は1960年から始まりワールドカップ開催の中間年に開催されて、ワールドカップに次ぐ規模で開催されている。現在（2007年秋）に2008年のオーストリア・スイスで共催される大会に向けて予選を行っている最中である。2004年までに12回開かれたが、優勝はオランダ、チェコ、フランスが2回、イングランド、ドイツ、スペインという強国も1回ずつ、それにベルギー、デンマーク、ギリシャが各1回が加わる。ワールドカップ優勝国が必ずしも強いという結果ではなく、分散する傾向にあって、イタリアのような強国でも未だ優勝経験がないことが注目される。現在のランク上位国では他にポルトガル優勝していない。かつて強国であったユーゴスラビアは解体されたがクロアチアは世界ランキングの上位にある。1992年には旧ユーゴスラビアでは内戦が始まり解体の道に入り、国連の決議により大会直前には出場停止となり、代わりに出場したデンマークが優勝した。このような事実からこの地域全体のレベルが高く、開催期間が短く、いろいろな国に優勝の可能性が生れるし、ヨーロッパ選手権とワールドカップと連続して勝ち続けることが困難なことをしめしている。唯一の例がフランスで、1998年のワールドカップと2000年のヨーロッパ選手権である。また開催国が必ずしも優位というわけでもない。

ユーゴスラビア連邦人民共和国（旧）が当時の世界ランキングでどの程度であったかを現在確かめるのは難しい。その後6国に分離独立した後の状況を見ると、最もランクが低いのがセルビアから独立したばかりのモンテネグロ（2006年分離独立）が実績に欠けるので186位をやや例外とすると、低くてもスロベニア（1991独立）75位、マケドニア（1992）67位、ボスニア・ヘルツェゴビナ（1992）の39位、セルビア（1992年ユーゴスラビア連邦共和国、セルビア・モンテネグロとして2003独立、2006年分離）22位、クロアチア（1991）10位ということで、半数はかなりランクの上位を占めている。

4 主要5国のトップリーグにおける選手の構成

各チームにおける選手層の構成とくに外国人比率に注目して検討してみる。チーム間の選手獲得競争が激しくなるとともに地元出身選手との結びつきが弱くなり、国際化・多国籍化が進んできた。チームの選手構成から自国選手が11人未満のチームもあるし、極端な場合としてイングランドのアーセナルやイタリアのインテルでは自国の選手無しで試合をすることもある。ファンをつなぎとめるには勝利や面白くないし感動を提供し続けなければチームは支持されないという難しさをかかえることになる。それでもファンが付いてくるということは外国籍選手に対する意識が変化して、日常的になってきたということでもあろう。また下部の育成リーグに育った選手が必ずしも地域の上部チームからデビューするとは限らない。青田買いもあるがそれほど選手間の移動が激しくなっている。

用いた資料はBBC Football Yearbook 2007/2008版であり、2006-07年の実績データである。イングランド、スペイン、イタリア、ドイツ、フランスの5国¹⁰⁾について1部リーグの登録メンバーの出身国を調べた（表5）。

出身地別の検討を行うと出身国は90国になる。それを国別で見ると、だんとつにブラジルがぬきんでいて、131人と3桁の数になっていて、極言するとブラジル人がいないチームは極めて少ないといえる。ついでアルゼンチンから90人、ウルグアイ30人と南アメリカの強国からが多いことが判明する。ヨーロッパ内ではフランスからが断然に多く、すなわち、4カ国で74人に達する。ついで、ポルトガル、オランダと世界ランク上位の国が続き、さらにデンマーク、チェコとなる。アフリカからはランク上位のセネガル（40位）31人を筆頭にカメルーン（25位）30人、コートジボワール（27位）27人、ナイジェリア（23位）24人と続いていて、この4カ国で百人以上を輩出している。さらに30位ギニア12人、37位チュニジア9人、38位モロッコ

表5 ヨーロッパへの移籍選手の国別順位

ランク	人数	イングランド	人数	ドイツ	人数	フランス	人数	イタリア	人数	スペイン	人数
1	3	ブラジル	131	フランス	40	ブラジル	25	ブラジル	29	アルゼンチン	46
2	2	アルゼンチン	90	アイルランド	28	デンマーク	17	セネガル	22	アルゼンチン	18
3	6	フランス	74	スコットランド	18	チェコ	12	モロッコ	12	フランス	11
4	8	ポルトガル	42	ウェールズ	17	オランダ	11	コートジボアール	11	ウルグアイ	7
5	5	オランダ	38	オランダ	17	クロアチア	12	カメルーン	11	セルビア	7
6	28	デンマーク	34	ポルトガル	15	スイス	10	アルゼンチン	10	ポルトガル	6
7	11	チェコ	34	オーストラリア	14	アルゼンチン	10	アルジェリア	10	ルーマニア	6
8	40	セネガル	31	スペイン	14	ポーランド	9	ギニア	9		
9	19	ウルグアイ	30	合衆国	13	合衆国	9	マリ	9		
10	25	カメルーン	30	アイスランド	9	ベルギー	7	チェコ	7		
11	32	アイルランド	29	デンマーク	9						
11	22	セルビア	29								
13	27	コートジボアール	27								
14	42	スイス	26								
15	23	ナイジェリア	24								
16	18	合衆国	21								

15人、45位ガーナ13人、49位マリ12人があり、エジプトは43位にもかかわらず5人に過ぎず、アルジェリアは85位で14人といったランクの順位とは異なる偏りが一部に見られる。

近年の移籍傾向は、1993年のボスマン判決以降EU内の選手については労働者として移籍の自由が認められて国内扱いされることとなり、その影響を受けて有力なチームはEU外の世界各地から優れた選手を集められるようになっていく。国により外国人枠は異なるが多くの選手を登録するようになってきた。日本人選手も1998年イタリアへの中田英選手の移籍以後、ヨーロッパ諸国のリーグへの参加が増えてきたがまだ存在感は小さい。

外国への移籍の条件は高額な報酬を得る選手にとって、経済的な事情、特に所得税制度が深くかわるようである。ジャック・チベール¹¹⁾によるヨーロッパ主要国の税率の話では、選手の手取りに対しての割増金はフランスが最高で124.78%、スペインが最も低く35.17%という格差があるとのことである。

国により移民、帰化する場合の条件が異なるので（血統主義と出生地主義）、単純に外国籍のみを見て比較をするのは困難である。また外国籍選手数の制限も異なっている。それはナショナルチームにおいてもいえることで、ヨーロッパには二重国籍所有者も多い（データの整理では外国籍として処理した）。旧宗主国と植

民地国との間にはいまだに密接な関係がみられる。

日本のJリーグにおいては試合において3人までの外国籍選手の出場が認められているし、代表チームにも、1994年アメリカ大会予選以来、ブラジルから帰化した選手が常に存在するようになってきた。

4-1 イングランド

主要国の中で最も多くの国から選手を受け入れているのはイングランドである。その広がりには64国（FIFAの単位）に及び372人に達する（20チーム、登録総数647人の57%）。英国連邦を構成している国を含めて9国はイングランドのみに選手を出している。しかしながら第1位はフランスで40人もいるし、フランス人のいないチームは2つしかない。ベンゲル監督が名古屋グランパスの後1996年からアーセナルにおいて成果を上げ、さらに現在リヨンの監督をしているウリエスが1997-2004まで7シーズン、リバプールの監督を務めたことなどもあり、1998年フランスのワールドカップ優勝以後増加したものと思われる。上位5国に集中し120人と約1/3を占めている。英国連邦構成国の40人とアイルランド28人を加えるとそのうちの半数になり（それらの選手を取り入れていないのは外国人比率の高いチェルシーとアーセナルのみ）、海峡を挟んだオランダ（17人、13チーム

に分散)が続くから近隣諸国の占める割合が高い。もちろん、EU19国から181人という約半数の選手が加わり、それを含めて全ヨーロッパから2/3を占めている。ラテン系のポルトガル、スペイン、イタリアからも38人來ている。他方33位のイスラエルから9人(ランク33位であるが他の国には2人のみ)を受け入れているのもこの国のコスモポリタン性を象徴しているといえようか。

またオーストラリア14人(9チーム)、合衆国からも13人(9チーム)というのも他の国にはない古い植民地関係の結びつきが目立つ。その流れから言えば、カナダ3人、ニュージーランド1人、南アフリカ4人が入っているのは他の国には見られない特色である。アフリカからは16国にわたる53人になり、ナイジェリア9人、カメルーン8人、セネガル7人、南アフリカ(73位)4人の他は3～1人に分散している。全体にアフリカの旧イギリス植民地系は20人と多くはないがランク171位と低いシェラレオネからも來ている。アメリカ(北・中、南)は11国43人で、他と較べてブラジル・アルゼンチンの割合が低く、それぞれ7人ずつである。その他の南アメリカも少なく、旧植民地ジャマイカ(96位)の4人に特色がある。アジアからは韓国の5人、中国の4人が目につく。

チーム単位でみると20チーム中14までが外国籍選手のほうが多い。それは上位チームに目立ち、マンチェスター・U(1位)が半数の17人ずつを除くと、アーセナル(4位)が31人中27人、ボルトン・ワンダラーズ(7位)が28人中22人、チェルシー(3位)が29人中20人、ブラックバーン・ロヴァーズ(10位)32人中23人、リバプール(2位)も35人中24人に達し、幾つかのチームはイングランド籍の選手のみではチームを組めないところまで外国籍が増えている。他方最下位のワトフォードでは39人中外国籍は12人、18位のシェフィールド・Uは36人中11人と外国籍が少ない。

ブラジル人はアーセナルに3人いるほかは4チーム、アルゼンチン人はリバプールに3人、

ウエストハム・Uに2人の他2チームしかなく、ブラジル人、アルゼンチン人ともに使っているのはリバプールとミドルスバラの2チームのみ、その他の南アメリカは8人しか在籍していないで、9チームは南アメリカの選手を置いていない。イングランドのサッカースタイルに南アメリカ系の選手は好まれないのであろう。

イングランドから外国への移籍は少なくドイツ(W・ブレーメン)とスペイン(レアル・マドリ=ベッカム、従って現在は合衆国)の2人しかいない。

4-2 ドイツ

ドイツは57国から選手を集めている。18チーム登録選手501人の半数251人が外国籍である。イングランドより外国籍比率がやや下がっている。ブラジルが最も多く25人、ブラジル人がいないチームはハンブルクとアーヘンの2チームしかない。次いでデンマークの17人、チェコ、オランダの各15人、クロアチア12人、スイス11人と続く。フランスは5人、5チームと少ない。国境を接する9国のうち、ルクセンブルクはランク176と低くて選手を出していないから、それを除いた8国から81人が集まっていて、全体の1/3を占めている。それにバルカン半島のクロアチア以下トルコまでの11国から58人を加えると過半に達する。トルコは6人とそれほど多くはなく、トルコリーグで活躍してドイツに移籍するというルートよりは、トルコ系移民として定着して下部組織から育てていると考えられ、かなり選手が帰化して国籍をとっているものと思われる。ナショナルチームにも帰化した系譜の人が入りだした。ポルトガルからは5人いるが、ヨーロッパのラテン系は概して少ない。EU諸国からが102人、非EUが52人、合わせて154人、61%がヨーロッパ人ということでヨーロッパ諸国への依存度が高い。

南アメリカからはブラジル以外にアルゼンチンから9人に、あと4国から9人を加えるのみである。合衆国から7人というのも少なくはない数である。アフリカからは16国というのはイ

ングランドと同じであるが、選手数は33人とずっと少なくなっている。カメルーン、ガーナの各5人、コートジボワールの4人の他は1・2人ずつに過ぎない。第2次大戦前に植民地を有していなかったためにつながりは希薄といえる。アジアからはイランの5人が目立つ。

チーム単位で見ると、外国籍選手の多いチームは8ある。ボルシア・メンヘングラントバッハ（18位）が31人中19人というのが数で最大、比率では15位のヴォルフスブルクの25人中18人、最小はA・アーヘン（17位）の28人中8人であり、どちらも最下位グループである。上位チームは27人中13～12人というレベルで外国籍選手を登録し、類似の構成比をとっている。

4-3 フランス

フランスはヨーロッパ諸国のなかで最大の選手輸出国の一つであり、急速に拡大している。フランスから外国へ移籍者が多いのは税制の問題が絡んでいるようである。同じ契約金なら外国でプレーするほうが手取りが増えるということである。フランスリーグに良い選手が居付かないということになる。ここで取り上げる他の4国のみで74人が移籍している。ブラジル、アルゼンチンに次いで数の数になりヨーロッパ諸国のなかで最も多いという状況である。

選手の輸入では45国と関係して214人、選手総数の約4割に達している。うちEUの13国を含めてヨーロッパ19国にアフリカ19国で大半を占める。南アメリカはブラジルがトップの25人を筆頭に4国47人に過ぎない。とはいえ20チーム中ブラジル人のいないチームは5しかない。フランスではブラジル、アルゼンチンとともにアフリカから選手を集めている状況に特色がある。上位10国のうち7までアフリカであり、総計113人と外国籍選手214人の過半を占めていることに良く現れている。特に旧フランス植民地から独立した国が12と2/3近くを占めて多く、100人に達する。こうした状況の下ではアフリカ系の選手がいないチームは存在しない。フランスの国籍は出生地主義で移民してきた人

がフランス国籍をとることが容易なために、フランス籍でもアフリカやカリブ海系の人が多い。また、海外領も有している。

外国籍選手の方が多いチーム（それも1人）は2、同数が2ということで、最大15人、最小7人と比較的チームにおける外国籍の人数は平均化している。

アフリカからはフランスとのつながりの強い国が上位を占めているという状況からアフリカからフランスを経由して、ヨーロッパ諸国へ選手が移籍する傾向を読みとることができる。2002年のワールドカップ日韓大会において初出場ながら準々決勝（7位）まで進んだセネガルのチームはレギュラーの全員フランスリーグ1部に所属していたし（23人中21人、セネガルのチームに所属していたのは控えのゴールキーパーのみ）、彼らの多くはその後他国に移籍してその当時のチームにはいない。¹²⁾

2006年のアフリカチームでもコートジボワールは13人、トーゴは9人、チュニジア7人と旧フランス植民地であった国は圧倒的にフランスリーグに所属していた選手が多かった。こうした状況は近年急速に進展してきたもので、1998年フランス大会ではカメルーン6人、ナイジェリア3人、モロッコ2人、チュニジア1人と北アフリカ諸国からもさほどの数の選手がフランスリーグで活躍していたわけではない。

4-4 イタリア

イタリアは41国から159人の選手が外国から入ってきている。20チームの全登録選手543人に対して外国籍選手は3割に過ぎない。6割弱のイングランドや半数のドイツに較べると外国人比率は大分低くなっている。内訳はEU16国と非EU8国を含めてヨーロッパが24国（6割弱）69人（4割強）を占めるが、アフリカからは7国、17人（ナイジェリア、ガーナ、コートジボワールから各4人）に過ぎず関係が稀薄である。

一方、南アメリカは6国、それに中央アメリカのホンジュラス1を加えて66人と、人数では

ヨーロッパとはほぼ同数を受け入れて依存を高めている。そのなかでブラジル31人、アルゼンチン18人という具合に3/4はこの2国に集中している。チームで見るとブラジル人を置いているチームが20中7あり、ミランのように6人もかかえている場合もあるし、4人、3人のチームがそれぞれ2つあることから、その依存の傾向にはかなりの偏りがみられる。同様の傾向はアルゼンチン人にもあって、置いているチームは半数の10もあるが、インテルは8人をかかえている。インテルはその正式名称インテルナツィオナーレ (Internazionale) の名前どおりインターナショナルなチーム構成をしていて、25人中イタリア籍は4人しかいなく、10におよぶ国から21人の選手を擁している。外国籍2桁の選手を持つチームが上記のインテルを含めて5あるが、最小はエンポリ (最近Aに昇格) の2人であり、サンプドリアの3人、レジーナの4人が続き、5人以下が7チームある。一般に中位以下のチームには外国籍選手は少ない傾向にある。

ヨーロッパ諸国との関係ではイングランド、ドイツ、スペインといった強国からは来てないが、フランスの11人を頭に、セルビア・モンテネグロの7、アルバニア、クロアチア各4、ボスニア3、ギリシャ2といったバルカン半島諸国に、ポルトガル5を加えた地中海諸国からが多いのが特徴である。

その他ではオーストラリアが3人いるほかに、北・中アメリカは0、アジアからはイランの1人と日本の3人 (現在は2人) に過ぎないので、かなり限られた国になっている。

4-5 スペイン

スペインはさらに外国数は減り37国になる。しかし選手数は193人とイタリアよりはるかに多く、20チーム総選手数532人の36%になる。この国の外国籍選手のなかで最も数が多いのはアルゼンチンからの48人で、ブラジルの38人を越えているのが注目される。アメリカ大陸からは10国、109人と半数以上が集中しているが、

ブラジルとカナダ (1人) を除くとラテンアメリカ、旧スペイン領、同じ言語圏からである。南アメリカからは上記2国に次いでウルグアイから13人來ているのを除くと、メキシコ、パラグアイといったランク上位国を含めてそれぞれの国からの人数は少ないが、ペルー、エクアドルを除くと他の国には行かないランクの低いベネズエラ、ボリビアまでも含んで広がっていることに特色がある。アフリカは6国、11人に過ぎず、そのうちカメルーンの5人と偏っている。

ヨーロッパ諸国との関係で見ると、EU14国66人、非EU6国、8人となり、ここもフランスの18人を筆頭に、ポルトガルの14人、イタリア8人とラテン系で固められている。37國中29国が1～3人しかいないので、外国籍選手が来る国の範囲が限られている。イタリア以上に閉鎖的とも言える。

チーム単位で見ると外国籍選手のほうが多いチームは、R・マドリー、FC・バルセロナ (最も外国籍比率が高く23人中15人、9国) の上位チームを含む6チーム、同数が1である。外国籍選手が5人以下は4チームしかなく、上位のチームの中ではバレンシアが30人中の8人と比較的低いのが目につく。アルゼンチン人の多いことは、6人が2チーム、5人が2チームと集中しており、アルゼンチン人のいないチームは3しかない。そのなかでバスク地方のビルバオはバスク人主体のチーム (スペイン籍においても) であり、外国籍選手は2人しかいなく、そこにはメキシコ、ベネズエラという他のチームでは見られない選手が含まれているのが面白い。ちなみに、ブラジル人のいないチームは6あるが、R・マドリー、FC・バルセロナはアルゼンチン人各2人に対してブラジル人をそれぞれ7人、5人と多く置いているところが興味深い。

5 むすびにかえて

今回検討したヨーロッパのサッカー大国を軸

とした、選手の国を超えた移籍については簡単に結論の出せる問題ではないが、ヨーロッパを中心に動いている世界のサッカー界を選手の受け入れと送り出しという点から幾つかのデータを整理してみた。

イングランド、ドイツ、イタリア、スペインの強豪4国は完全に選手の輸入国である。フランスはやや状況が異なり、総数からすればアフリカを主軸とした輸入国ではあるものの、ヨーロッパ最大級の選手輸出国となっている。現在のところ個人の経歴までさかのぼってはいないが、フランス経由で他国に移籍した選手を数え上げればより多くの人がフランスから移籍したことになる。外国籍の人数、選手比率からいえばイングランド、ドイツが上位にあってイタリアは最も少なくサッカーが盛んな割にはやや閉鎖的という姿が見えてきた。イングランドはプレミアムリーグの豊かな資金力（TV放映権が大きい）により、最も広く世界から選手を集めることが出来ているという実態が見えてきた。スピードと体力とがある人には挑戦しやすい場に見える。それに対して技術的には上位とも言われているイタリアのサッカーがやや守備的な姿勢の強い試合運びから、それに適応できる選手に限られるのかとも思われる。スペインは攻撃的色彩が濃く面白味があるという分類が定着しているなかで、選手層がラテン系に特化しているという姿が浮かび上がってきた。ドイツはラテン系諸国とイングランドとの中間形態といえようか。

サッカーの世界ではアフリカはヨーロッパに近い国という感じがして、移籍に対する抵抗感が少ないように見える。一旦、ワールドカップやヨーロッパのチームで活躍すれば、その後は活躍の場が増えてくる。ラテンアメリカ諸国にとっても合衆国がサッカーの求心力を持たないので¹³⁾、有力な選手は大西洋を越えてヨーロッパで働くことに現在では抵抗がないようである。

ソ連の解体以降、旧東ヨーロッパ諸国からサッカー大国への選手の移籍が活発になった。

旧ユーゴスラビアの分裂後ではクロアチアが世界ランク上位にいるし、旧ソ連から独立した国ではウクライナが力をつけてロシアよりランクが上であるが残りの国は停滞しており、サッカー先進国にあまり進出できないでいる。旧ユーゴスラビアの解体と、政情の不安定が長引いたことでバルカン地域からの選手の流失を促した。

アジア・オセアニアからはヨーロッパが遠い位存在である。オーストラリアからイングランドを中心に移籍という流れを別にすれば、韓国、中国がイングランドに4人、ドイツに1人、イランからはドイツの5人を含めて8人、日本も5人という具合に少ない。アラブ諸国からはオマーンからイングランドに1人のみで、ワールドカップ出場回数が多いサウジアラビアはいないという有様である。

個々の選手の移籍をみれば、移籍料、報酬といった金銭面と監督との関係が前面に出てくるし、代理人が介在するので複雑であって整理しきれない。しかし統計的に集計すれば国による歴史的・文化的な面からの結びつきの強弱が反映してくる。ヨーロッパ諸国にとって日本は遠い存在になってくる。

今までの日本人のヨーロッパ進出についても本当の強豪チームにはスコットランドのセルティックに移籍してからの中村俊輔と中田英寿がAS・ローマにいた1年のみで、稲本潤一もイングランドのアーセナルでは芽が出なくて、トルコのイスタンブールの名門ガラタサライでの活躍が認められてドイツのフランクフルトに移籍出来た。高原直泰もハンブルクでは結局レギュラーを取れず、フランクフルトに移籍してようやく評価が高まった。しかし、フランクフルトは1899年設立の古くからの名門チームではあるが中位にあって2部にも落ちることのあるチームである。京都パープルサンガに在籍していた韓国のパク・チソンがオランダのアイントフオーフェンでレギュラーをとり、そこを経由してマンチェスター・Uで20試合（06-07年度）に使われているのは注目される。同じくオラン

ダ（ここではオランダリーグの分析を欠くが）に行きながら定着できなかった小野伸二や平山相太（かなり短期であるが）と比較するとよく分かる。

日本人選手のヨーロッパへの進出についてみると、短期的には市場拡大、スポンサー、観客動員などの要素で移籍できることがあったが（三浦知良の1994—95イタリア、ジェノヴァの例）、国・チームのサッカースタイルに合わなければ続かないので異質な世界で継続するにはより多くの困難がともなう。今まで多くの選手が挑戦を試みてきたが、イタリアやスペインの外国人構成を見ると、アジアからはよほどの技術が評価されない限り定着するのは難しく見える。イングランドのスピードと高さが求められるスタイルに日本人が適応するのも困難だとすると、戦前から日本人を受け入れてきた大きなバックグラウンドがあるドイツが一番似合うのかもしれない。それは戦後東京オリンピック開催を契機にD・クラマーの指導の下で日本のサッカーが成長の基礎が固められてきたことにもつながるような気がする。他方、フランスで2部から1部へ昇格してきたル・マンの松井大輔は異質な存在であり、またスイス・オーストリアのリーグで活躍している選手の今後の評価と合わせて、日本人選手のヨーロッパ市場への適応が注目される。

注

- 1) 寺阪昭信 (2006): 「サッカーと地域1 ドイツを中心に」 流通経済大学論集 41—1 pp. 31—46.
- 2) 厳密にはイングランドでプロのスポーツとして開始され、最初にヨーロッパ諸国に普及した。
- 3) 第1回から17回まではFIFA Magazine 2006/No.6/7 p.56-57から出場回数、試合数、ポイントをとりだし、それに筆者が2007年8月の世界ランクおよび、2007年版 Almanac of World Footballのプロ選手数を加えた。

- 4) FIFAに加盟している国の数を単位とする。国の消滅と新たな誕生は過去を引き継いでいるが、東ドイツの場合には西ドイツと同時に出場したので別扱いとなっている。
- 5) 2006年のワールドカップでは5国中チュニジアを除いて4国が初出場であった。今後も初参加が増えることが予想される。
- 6) ()の数字は加盟国=2006年ワールドカップ予選に参加した国の数。またアジアとオセアニアはFIFAでは別組織になっているが、オーストラリアがアジアの連盟に加入したこともあり、オセアニアは本稿ではほとんどヨーロッパに出ていないので一緒に扱った。
- 7) このことがドイツがイングランドの次いで選手の輸入が多いことと関連すると思われる。
- 8) アンダーラインは都市名をさす。都市名がチーム名に直接表されていない場合は括弧に都市名を入れた。カッコ内の順位と点数はKicker (2007): Champions League 2004/2005, 07/08, 誌に掲載されていた点数（勝点によるポイント）とそれに基づく順位である。
- 9) かつて各国優勝1チームずつの時代には多く出場し、優勝したこともある。
- 10) その他、スコットランドとオランダリーグが分かる。
- 11) ジャック・チベール「フットボールを謳う」（「サッカーマガジン」No.1156, 2007・10・9号）による。
- 12) 2006-07年度にフランスリーグ1に残っている選手は7人。
- 13) 合衆国の選手構成のデータを持っていないので、どの程度ラテンアメリカから移籍しているかは正確にはわかっていないが。

資料

- Oliver, G (2006): Almanac of World Football 2007. Headline Publishing Group, London
- BBC. 2007: Match of the Day Football Yearbook 2007/2008. Interact Publishing
- Kicker (2007): Bundesliga 07/08
- Kicker (2007): Champions League 2004/2005, 07/08, FIFA magazine 2006/No.6/7
- 各年次のワールドカップオフィシャルガイドブック 1998, 2002, 2006
- King, A (2003): The European Ritual, Football in the New Europe. Ashgate Publishing, Hants.